

## 賢者の知恵

賢者の知恵

2016年03月02日 (水) 山本太郎

### 性行為でうつることも!? 知っておきたい「ジカウイルス感染症」の恐怖 ついにWHOが緊急事態宣言

■ コラム ■ 共有 A 文字 昌 印刷

いいね! 18 ツイート ブックマーク 2 RSS



2月に「緊急事態」が宣言されたが、どのように対応すればよいのだろうか…… (PHOTO) gettyimages

文／山本太郎（長崎大学熱帯医学研究所教授）

#### ジカウイルス感染症、「緊急事態」の理由

2016年2月1日、世界保健機関（WHO）はジカウイルス感染症（ZVD）\*に対し、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC：Public Health Emergency of International Concern）」を宣言した。

「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」とは、大規模な疾病発生のうち、特に国際的な対応を必要とするものを指す。かつては黄熱病、コレラ、ペストの三つの感染症を対象としていたが、2005年に国際保健規則が改正され、原因を問うことなく国際的な公衆衛生上の脅威となりうるあらゆる事象が対象となった。

その結果、WHO加盟国は公衆衛生上の緊急事態に対して通告義務を負い、WHOは通告内容に応じて迅速な手段を講じる義務を負う。強制力はないものの、出入国制限を勧告できる。これまでに、PHEICが宣言された事態には以下のようなものがある。

**2009年 新型インフルエンザの世界的流行**

**2014年 野生型ポリオの世界的流行**

**2014年 西アフリカエボラ出血熱流行**

**2016年 ジカウイルス感染症の世界的流行**

今回、ジカウイルス感染症に対しPHEICが宣言された。最大の理由は、妊婦に対する感染が新生児に与える影響が懸念されたことにある。

目下、アジアにもジカウイルスが侵入していることを考えれば、WHOが全世界的な評価体制を緊急に立ち上げて、ジカウイルス（あるいは南米で流行している株）の関与を明確にし、感染拡大に取り組むことは意味のある対策となる。さらに、そうした流行に関しワクチン開発を加速することが求められる。

# 現代ビジネス

『現代ビジネスプレミアム倶楽部』へのご入会はこちら

トップ ニュースの深層 企業・経済 政治を考える ニッポンと世界 **オトナの生活** メディアと教養

山本太郎 賢者の知恵

2016年03月02日 (水) 山本太郎

性行為でうつることも!? 知っておきたい「ジカウイルス感染症」の恐怖  
ついにWHOが緊急事態宣言

コラム 共有 A 文字 印刷

いいね! 18

ツイート

ブックマーク 2

RSS

## ■ 五輪を控えるブラジル、感染者数150万人超

2016年夏、リオデジャネイロオリンピックが開催される。当然、世界中の人がブラジルを訪問することだろう。米国疾病予防管理センター（米国CDC）は、2016年のオリンピック開催に向けて、妊娠中の女性の渡航を見合わせるよう勧告した。

米国ではこれまで9人の妊婦のジカウイルス感染が確認されているが、そのうちの一人が小頭症の赤ん坊を出産したことが明らかになったからである。9人はいずれも南米への渡航歴があり、現地でウイルスに感染した可能性が高い。

小頭症の赤子を出産した女性は妊娠12週まで感染地域に滞在していたという。また、9人中2人が流産していた。小頭症とは、出産時に脳や頭蓋骨が月齢に比較して有意に小さく、結果として脳に様々な障害が生じる可能性のある病気である。

ブラジルでは2015年以降の累積感染者数が150万人を超えた。また同年10月時点で、小頭症の発生数が3000を超え、11月以降でも5000例を数えるという。これまで同国における発生数が年間約100例であったことからすれば、恐ろしい数である。

また彼の地ではギランバレー症候群患者の増加も報告されている。ジカウイルス感染と小頭症やギランバレー症候群との因果関係については、いまだ疑いは高いものの、科学的には証明されていない。

しかし2015年におけるブラジルでの患者発生数を見れば、注意が必要なことは明らかである。それが、米国CDCによる勧告につながったのだと思う。

ここでもう一つ注意すべきことがある。

米国での小頭症児出産の例から見ても、また、中枢神経系の器官形成期を考えても、おそらく妊娠初期にジカウイルスへ感染することが小頭症発症につながる可能性は高い。

これはすなわち、本人が妊娠に気づかない時期の感染が、より危険だということの意味する。その意味では、妊婦が渡航を控えるだけでなく、妊娠可能性のある女性の渡航の延期を広く呼びかける必要がある。感染流行地域についての情報は以下のサイトで更新されている。参照いただきたい

(<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000113142.html>)。

# 現代ビジネス

『現代ビジネスプレミアム倶楽部』へのご入会はこちら

トップ ニュースの深層 企業・経済 政治を考える ニッポンと世界 **オトナの生活** メディアと教養

山本太郎 賢者の知恵

2016年03月02日（水） 山本太郎

性行為でうつることも!? 知っておきたい「ジカウイルス感染症」の恐怖  
ついにWHOが緊急事態宣言

📖 コラム 🔄 共有 A 文字 🖨 印刷

👍 いいね! 18

🐦 ツイート

🔖 ブックマーク 2

📡 RSS

## ■ そもそもジカウイルス感染症とは何か

ジカウイルス感染症とはどのような病気なのだろうか。

まずはこれまでの歴史的経緯から見ていく。ジカウイルスは、1947年ウガンダのジカと呼ばれる森林のアカゲザルから初めて分離された。その後1952年にウガンダとタンザニアで、また1968年にはナイジェリアでヒトへの感染が確認された。

2007年には、ミクロネシア連邦のヤップ島で流行（185の疑い例、45の確診例）が、2013年にはフランス領ポリネシアで約1万人規模の流行が確認された。

2014年にはチリのイースター島で、そして2015年以降で言えば、南アメリカ大陸及びカリブ海の20の国や地域で感染が確認されている。日本での初確認例は2013年の仏領ポリネシアからの輸入症例であった。

症状の大半（約80%）は無症候性であるが、発熱や発疹、関節痛、結膜充血、頭痛といった症状を訴えるものもある。

ただし、割合は低いがギランバレー症候群を発症する者や、妊婦が感染した場合、新生児に小頭症が生じる場合があることは先に見たとおりである。潜伏期間は3～12日となっている。病気は蚊（ネッタイシマカやヒトスジシマカ）が媒介する。

ネッタイシマカやヒトスジシマカは主に屋外吸血性である。したがってまず、流行地域では「蚊に刺されないこと」が最重要事項となる。昆虫忌避剤を使用したり、皮膚を露出しない服を着用したりする。また、ネッタイシマカは屋内に生息していることも多く、注意を要する。

先年、日本国内でもデング熱の国内流行が大きく報道された。ジカウイルス感染症もデング熱と同じ蚊によって媒介される。暖かくなれば、国内での感染にも警戒する必要がある。

妊娠とジカウイルス感染については、特段の注意が必要である。まず、妊娠期間は全期間を通じて感染に対して細心の注意を払う必要がある。一方、ジカウイルスは感染して最長4週間は体内に残ることがあるとの報告もある。これは症状のない人でも同様である。したがって、流行地からの帰国後は四週間ほどの避妊が勧められる。

# 現代ビジネス

『現代ビジネスプレミアム倶楽部』へのご入会はこちら

トップ ニュースの深層 企業・経済 政治を考える ニッポンと世界 **オトナの生活** メディアと教養

山本太郎 賢者の知恵

2016年03月02日 (水) 山本太郎

性行為でうつることも!? 知っておきたい「ジカウイルス感染症」の恐怖  
ついにWHOが緊急事態宣言

コラム 共有 A 文字 印刷

いいね! 18

ツイート

ブックマーク 2

RSS



(PHOTO) gettyimages

また感染すればジカウイルスは男性精液中にも存在することが知られており、性行為を通して感染する可能性もある。流行地に滞在した男性が妊娠可能年齢の女性とセックスをする際にはコンドームの使用などの注意が、最低4週間ほどは必要になる。これらは覚えておいて欲しい情報である。

万が一、ジカウイルス感染症が疑われたら……。流行地域から帰国後に発熱などジカウイルス感染を疑う症状が出た場合、専門医療機関受診が勧められる。専門医療機関のリストは以下のホームページなどにも記載されている。最寄りの医療機関を受診されたい ([http://www.kansensho.or.jp/mosquito/medical\\_list.html](http://www.kansensho.or.jp/mosquito/medical_list.html))。

最後に、インフルエンザやコレラ、中東呼吸器症候群 (MERS)、エボラウイルス感染症、そしてジカウイルス感染症と、この数年間だけでも世界中で多くの感染症が流行した。

地球の温暖化や、私たち人類の生態系へのとめどない進出がそうした感染症の流行をもたらしている可能性は否定できない。大きな意味での感染症対策には、私たちの「あり方」についても考える必要があると、筆者はときどき思う。

\*報道機関はほぼすべて「ジカ熱」として報道しているが、WHOやCDCなどは「ジカ熱」を使用せず「ジカウイルス感染症」を用いている。厚労省のホームページのタイトルも「ジカウイルス感染症」となっている。1月21日に厚労省から出た通知が「ジカ熱に関する情報提供及び協力依頼について」となっていてこのために報道機関では「ジカ熱」が使われることになったのかもしれない。感染者のかなりの部分は発熱がないのではないと思われる。したがって、「ジカ熱」という表現は誤解を生む可能性がある。

**山本太郎（やまもと・たろう）**

1964年生まれ。1990年長崎大学医学部卒業。医師、博士（医学、国際保健学）。京都大学医学研究科助教授、外務省国際協力局課長補佐等を経て、長崎大学熱帯医学研究所教授。専門は国際保健学、熱帯感染症学。アフリカ、ハイチなどで感染症対策に従事。著書に『矢われゆく我々の内なる細菌』（みすず書房）、『大震災のなかで 私たちは何をすべきか』（内藤克人編、岩波新書）、『ハイチ いのちとの闘い』（昭和堂）、『新型インフルエンザ 世界がふるえる日』『感染症と文明——共生への道』（岩波新書）、『国際保健学講義』（学会出版センター）、訳書に『感染症疫学—感染性の計測・数学モデル・流行の構造』（昭和堂）、『エイズウイルスの起源と進化』（学会出版センター）など。 <http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/newrect/index.html>



感染症との闘いは人類に勝利をもたらすのか。防疫による封じ込めは、大きな悲劇の準備にすぎないのか。共生の道はあるのか。感染症と人類の関係を文明の発祥にさかのぼって考察し、社会が作り上げてきた流行の錯相を描き出す。